

『好循環のまちづくり！』

枝廣 淳子 著

農業・農村領域 上席主任研究官 梶脇 利彦



『好循環のまちづくり！』

著／枝廣 淳子

出版年／2021年

発行所／岩波書店

本書は、著者がいくつかの自治体に足を運び、地域の活性化や地方創生に取り組んできた中で作り上げてきた「まちづくりのプロセス」を紹介し、そのノウハウを『「それぞれの地域で使ってもらえるようにしたい！」との思いで』執筆されています。本書は、6つの章から構成され、

「第1章 まちづくりのホップ、ステップ、ジャンプ！」では、まちづくりに①「未来の望ましいまちの姿を描く」、②「つながりをたどって現状の構造を理解し、望ましい好循環を描く」、③「悪循環を断ち、好循環を強めるプロジェクトを立案・実行する」の3つをそれぞれ「ホップ」、「ステップ」、「ジャンプ」と呼んで整理し解説しています。この中で私が印象に残ったのは、まちづくりのプロセスを進めていくための推進体制づくりであり、ある自治体の事例では共有ビジョンを作る委員会の委員は、町民と役場職員で構成され、両者はいずれも公募により選出され、選ばれた町民と役場職員の混成チームにするといった方法でした。町民や役場職員の若手の中からチームのメンバーになりたいと自発的に手があがる、このことがまちづくりの出発点であると感じました。

「第2章 まちづくりのホップ」では、「ビジョンとは何か」、「ビジョンの効用とは何か」について、著者の考えを述べ、将来から現在を振り返る「バックキャストिंग」というやり方で、まちづくりのための共有ビジョンを描くことの有用性に言及し、アイデアが出やすくなるコツを教えてください。アイデアを出すのは、なかなか難しいものになりがちであるところ、付箋や模造紙などを使ったシンプルでやさしいアイデアの出し方を紹介している点に面白さを感じました。

「第3章 まちづくりのステップ」では、物事は様々な要素でつながってできているという考え方である「システム思考」によって、まちの構造を見える化していくことを解説しています。まちが『①「このままいくとどうなるか」「どうしたいのか？」のパターンを描いてみる』、『②「このままパター

ン」がどうして生まれているのか、その構造を要素のつながりで考

える』、『③「理想パターン」に変えていくために、構造のどの要素やつながりを変えればよいかを考える』、とし要素をつないで、まちの構造を探っていく「ループ図」の作り方を示しています。過去や現状についての認識共有や目標のすり合わせを行っていくうえで「ループ図」の作成は、有用な方法の1つであると感じました。

「第4章 まちづくりのジャンプ」では、具体的なプロジェクトを検討していく上で、「自分たちのまちの構造上のあちこちに、小さくてもよいから好循環を創り出せないだろうか？そのような視点でループ図を見て、具体的なプロジェクトを考えていく」と「多くのまちに役立つ、いくつかの“基本形”」があるとして、そのポイントを紹介しています。また、自分たちの取り組みが望ましい方向や構造に近づいているかの物差しとなる指標づくりを説明しており、この指標づくりに「行政指標」と「住民指標」を組み合わせるといった方法はプロジェクトを効果的なものとしていく上で大切であると感じました。

「第5章 プロセスから生まれるもの」では、まちづくりのプロセスから得られるものは「希望」であり、「厳しい状況でもこんこんと湧き出す希望の泉を創ることこそ、まちづくりの大事な鍵だと」し、

「終章 まちの持続性可能性と幸福度を考える」では、まちづくりは、「ホップ、ステップ、ジャンプ！」のプロセスを通じて「まちの人たちが民力を高め、まちづくりのチームが生まれること。それこそがまちづくりの要諦」だと結んでいます。

農山漁村の過疎化や少子高齢化が急速に進む中で、「好循環なまちづくり」に取り組むことの難しさはわずもがなですが、どのような手順を踏んで人や組織を動かしていくことが大切であるかの方法論が丁寧に書かれており、農山漁村振興の調査研究に取り組む上で、現場での実践にも役立つ一冊になると思います。